

2007年 6月30(土)・7月1日(日) —第1回—

JAみどりの 田んぼの生きもの調査

小さなお子さんも多数参加



調査日時：2007年6月30日・7月1日

参加人数：約60名

参加団体：パルシステム神奈川ゆめコープ組合員・職員等40名、JAみどりの生産者・職員

調査地点：美里町北浦天王筒・大子田利夫さんの無・無栽培田(紙マルチで抑草)

調査項目：生きもの観察(田んぼ=水生昆虫、畔=カエル、水路=魚貝類、蕪栗沼=魚など)

田んぼは生きもの之母体、「胎内のように」と実感

田植えから稲刈りまで年間を通した産直交流を10年以上続けるJAみどりのと「パルシステム神奈川ゆめコープ」。宮城県美里町の田んぼで草取り交流会が開催され、生きもの観察を行いました。参加者は3班に分かれ、田んぼの水生昆虫、畔のカエル、水路の生きものをそれぞれ観察。湿地の生態系を守る国際条約「ラムサール条約」で湿地登録されている宮城県蕪栗沼にも訪れ、魚などの観察を行いました。地域の特産のソーセージ作り体験も行うなど盛りだくさんの活動でしたが、神奈川県横須賀市から来た組合員の家族、三雲大輝君は「一番印象に残っているのは田んぼの生きもの。あんなにたくさんいると

は思わなかった」と目を輝かせていました。冬場の渡り鳥の観察などで訪れて以来、すっかり株栗沼周辺の自然に魅了され、当地に来るのは3回目という神奈川県厚木市の高橋裕子さんは「田んぼに入った感触は、母の胎内のように」と表現。

JAみどりのの高嶋秀治さんは「米を作る基盤の田んぼに実際に入ってもらい、生きものがたくさんがいることを見て、安全性を理解してもらえれば」と話しています。「産直活動は交流が一番大切。消費者がどういう食べものを望んでいるのか直接聞ける機会だから」(田主の大子田利夫さん)。生きもの調査を交流に取り入れることで、いっそう地域の魅力や食の安全を語るができそうです。

JAみどりの

産地紹介：1996年に宮城県の6農協(遠田郡涌谷・田尻・小牛田・南郷町、志田郡松山・鹿島台町)合併して誕生しました。06年実績で米生産量の13%を占める特別栽培米の割合を、三年後には80%以上にしようとしています。また、管内の蕪栗沼と周辺の水田がラムサール条約で湿地登録されています。

主な出荷品目：ひとめぼれ



調査地：宮城県美里町

草取りの前に稲とヒエの違いを説明する大子田さん



株栗沼周辺は、かつて食料増産のため開墾が行われた



見つけた生きものたち

田んぼの中：イトミミズ、ユスリカ、ヤゴの抜け殻、モノアラガイ(?)、ガムシの幼虫(?)、オタマジャクシなど

田んぼの畔：アマガエル、トノサマガエルなど

水路：ナマズの稚魚、ザリガニ、ドジョウ、トノサマガエル、フナなど

蕪栗沼周辺の川（カゴ網等）：タイリクバラタナゴ、ドジョウ、ギンフナ、オタマジャクシなど

ヤマセによる霧雨が降る中、熱心に生きものを探す



蕪栗沼周辺の小川でカゴ網で魚を捕獲

